
東方の小説らしきもの（仮）

わっくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方の小説らしきもの（仮）

【Nコード】

N4125N

【作者名】

わっくん

【あらすじ】

気がつくと見知らぬ場所に……とかそうゆう始まり。よくある展開で、よくいる主人公のお話。

タイトルの（仮）はまだ外せそうにない。

注意書きはよんでね。

10/21 目覚、運動を修正。

注意書き

この作品にはオリジナルキャラクターを登場させるため原作設定とは違う部分もあります。

キャラクターによっては完全に原作設定を無視することもあります。

また、作者は初心者です。

そのため作者の妄想が入り混じったものになっているので読者によつては納得できない部分や不快に感じる等などがあると思います。

例：キャラの性格が違う、キャラの扱いに対して不満を感じる…など

これらに平気な方のみご覧なってください。

この注意書きは場合によっては内容が増えることがあります。

ブローグらしきもの

「……ん」

おもい目蓋を開けるとそこには大空が広がっていた。

「……？」

青い空、白い雲、背中から伝わる冷たい感触。

今俺は地面の上に寝ているんだな、と理解する。

なぜこんなところに倒れてるんだ？

寝起きのせいかな少しぼうつとする頭を働かせ自分の記憶を探ってみる。

…ダメだ、思い出せない。

前日に酒でも飲んでいたのか？倒れる前のことがわからない。

仕方ない、今は諦めるか。

こうゆうのものは無理をして何とかなるものじゃないだろう。

ん？視界の端に何かが映る。

あれは…花卉？

飛んできた方向を見る。

「…おお」

そこには大きな桜が咲いていた。

普通の大きさの何倍もある巨大な樹だ。そのせいかとても迫力がある。

何だろう？この樹…とても綺麗だがそれと同時に嫌な感じがする…

何だ？何かが引っかかる。思い出しそうで思い出せない。確かこれは…

「そこで何をしているの？」

考え事をしているといきなり誰かに話しかけられた。

声からして女性だな。聞こえたのは足の方から。

実はまだ起き上がってなかったりする。この際だ、何時までも地面にへばり付いてないで立ち上がろう。

「花見に来た…ってわけでもなさそうね。それならこんな危険な場所には来ないもの。それで貴方は誰？」

声の主を見ての第一感想、美しい…

着物を身につけその間から見える透き通るような肌、宝石のように澄んだ瞳。

口元を扇子で隠すその動作にさえ心を奪われる。

彼女にはあの大きな桜にあった妖しい美しさの様に人を引き付ける魅力があった。

惚れた。これは世間で言う一目惚れ

「…だんまりかしら？」

つといけない。これじゃあ彼女の機嫌を悪くさせてしまったかな。

「俺が誰だと聞かれてもそれは自分でもわからないな。」

「わからない？どうして？」

「多分…記憶喪失というやつだと思う。今まで何をしていたか、自分がいったい誰なのか、何一つわからないんだ。」

彼女はじつとこちらを見つめてくる。そこからは猜疑心と警戒の色が感じられる。

まあ、無理もないか。どうゆうわけか知らないがここは危険な場所らしい。

人の寄りつかない場所に一人寝転がっていたのなら不審者だってこ

とかな。

「…そう、なら」

すつと口元を覆っていた扇子を降ろし

「記憶が戻るまで私の家に来ないかしら？」

「……はい？」

笑顔でこちらに手を差し伸べた。

さて、いきなりだが美女に家に来ないかと誘われたどうする？

それも自分に行くあても帰るあてもなく途方にくれている状態で。
しかも惚れている女性から。

こんな時に手を差し伸べられるなんてそれはもうまさに天の救いとはこの事だ的な状況だ。

喜んでその誘いを受けるべきだと考え手をとる？

それとも「落ちつけ、これは孔明の罠だ」と考え断る？

俺？俺だったら思考が停止、もしくは混乱状態になるだろう。
罠かどうか考える暇もなくね。現にそうだし。

「……………」

こうやって無表情を装い冷静なふりをしているが

「（落ちつけ、落ちつくんだ。素数を数えるんだ。そしてCOOLになるんだ、K O O Lに…）」

実は絶賛混乱中。俺ってこんなに女性耐性なかったのか……

「…また黙りかしら？」

頬を膨らませながら話しかけてきた。

おゝこれはこれでいいな……じゃなくて

「素敵なお誘いだが遠慮するよ。」

流石俺、こんな精神状態でも紳士的に対応できてる。どこが紳士的なのか全然わかんないけど。

「あら、どうして？」

いやいや、何の理由もなく見知らぬ男を家に連れ込むのはどうかと。

「俺が何もしいとは限らんぞ？」

「大丈夫よ。私の家にはそんなことで遅れをとったりする者はいないわ。むしろ何かする側よ。」

わーお、それは安心していいのか？

「そうゆうことよ。ほら、何時までも座ってないで」

「ちょっ……」

彼女の柔らかい手が俺の手を握り引つ張り出しそのまま走り出す。

というより強制なのか。すごい嬉しいけど。

「まっ待ってくれ！」

「しつこい男は嫌われるわよ？」

振り返り、無邪気な子供を思わせる笑顔を見せ彼女は答える。

「あ、名前を覚えてもらってないなと思って」

「んー、そういえばそうだったわね。」

一度立ち止り彼女はこちらを向き口を開く。

「私は西行寺 幽々子。白玉楼で幽霊の管理をしている者よ。」

ブローグらしきもの（後書き）

これから主人公は幽々子様ラブになる予定。

でも最初の方は出番少ないかも……………

紹介

「…で、その子を連れてきたの？」

「ええ、そうよ」

「……」

俺は幽々子さんに連れられ白玉楼の宴会場（外）にいる。

白玉楼というのは幽々子さんの家で何というかでかい屋敷、そして桜が多い。

冥界にあるらしく集まるのは主に幽霊の類、ここの桜目当てでよく春には花見をするために集まってくる。

そんでもって今俺達の前にいる女性、名を八雲 紫さんという。

金色の髪に西洋と東洋が混ざったドレスの様な服装を身につけていて、常に日傘を持っている。

幽々子さんの友人で1000年以上生きる大妖怪。

「（類は友を呼ぶって奴か。二人とも雰囲気似てる気がする）」

紫さんはいつの間にか出した扇子で口元を隠しこちらをジッと見つめる。

あゝやっぱり警戒されてんなゝそれと俺は別にその子って歳じゃない気がするなゝ

身長は二人より上だし。でも妖怪から見たら俺は子供か？

「ふうん、まあ…幽々子がいいのなら私は何も口出しはしないわ。」

お、意外に許可を貰えた。

「それで貴方は何と呼べば？」

「あゝそうですね…」

名前か…どうしよう？その他の記憶と一緒に飛んで行ってしまったからな。今適当につけないと。

でも結構考えるのって苦労すると思うんだよね。特に自分のとか。

「それじゃあ…天空「アマゾラ」」

特に深い意味とかは無い。目が覚めた時最初に見えたのが空だったからという理由。

そのままだと捻りがないから読み方を少し変えてみた。

「天空……ねえ」

「残念、もし決まっていなかったのなら私が付けてあげようかと思ったのに」

う、そんなガツカリした顔をされるとちよつと罪悪感が…

「因みにどんな名前をつけようと思ったの？」

「みいちゃん」

勘弁して下さい。俺は猫じゃないです。

「妖夢達にも紹介したいのだけど、紫はどこにいるか知ってる？」

「そこで寝てるわよ。」

指の先には酒びんに囲まれながら横たわってる女の子。なんで？

「あらあら」

「さっき一気飲みをさせたら倒れちゃったのよ。藍はたぶん厨房じゃないかしら。」

なるほど。花見だもの酒は飲みますよね〜

え？俺？もちろんさっきから飲んでますよ。周りにいる幽霊たちに勧められて。

「ささ、天空も飲んで飲んで。」

「いやいや、さっきから沢山飲んでますって。」

そろそろつまみが欲しいです。胃が…

・・・・・・・・・・・・・・・・

「zzz」

「寝ちゃったわね、彼」

それからしばらくして花見は無事終了し、集まった幽霊たちも帰って行った。

まだ飲み足りないという紫の言葉から私達はそのまま夜まで飲み続けた。

その間に天空は酔いつぶれて寝てしまったけれど。

「今更だけど、どうゆう風の吹きまわしかしら？幽々子が男を連れてくるなんて。」

あら？そんなに珍しいことだったかしら？

「初めてよ。珍しいに決まってるじゃない。それで？どうして連れてきたの？」

「ん？なんとなく？」

「…もう一度聞いわ。彼をここに連れてきた理由は？」

理由、理由……無いわね。特に気になるわけでもなかったけれど何

というか…

「偶にはこうゆうこともいいかなって思ったのよ。」

単なる気まぐれ、これが一番しっくりするかもしれない。

「…そう」

「？紫ならもう少し突っかかってくると思ったのだけれど？」

「別に…いつもの気まぐれじゃないかってね。」

さっすが親友、的を射てるわね。

「そろそろ私達はお暇させてもらっわ。藍、行くわよ。」

「ふあい。橙、ふおら行くぞ。」

「……ん」

相変わらず紫の従者はしっかりしてるわね。少しふらついてる上呂律も回っていないけど。橙妖夢はまだ目を覚まさないし、

「にしても…どうしてかしらね？」

自分でもわからない。でも天空を見てみると、傍にいと落ちつける。

「（実は前に会っていたり……流石に無いわね）」

寝ている天空の顔を見ながらそう思う私だった。

初日

「……マジか」

正しいって何だろうね。

正しい事をしていれば皆幸せになれるのかな？

幸せってなんだろうね。

自分の幸せは皆も幸せになるのかな？

そんなの誰もわからない。

正しいことも幸せも皆違う、そもそも定義なんて曖昧なものだ。そもそも誰が決めたことなのだろうか？

……と、意味ありそう（なのか分からないけど）なことを言っているが実は今の状況とまったく関係無いんだな

ただちよつと現実から目を背けたかったんだよ…

「さあ！覚悟しろ侵入者！！」

なんでさ……いや、理由なんて分かってるんだけど…

「（幽々子さん…俺の事説明し忘れたな…）」

「白玉楼の天井だ」

うん、定番な台詞は言わなかったぞ。
何が定番なのか分からないけど。

「ここ何処だろう？」

たぶん客間かな、昨日の花見の最中寝てしまったから誰かが俺を運んだってことだよな。運んできてもらった人に感謝だ。

そう考えるとここはあの広い白玉楼の一室ということになる。つまりここの構造を知らないもの…要するに俺が外に出たら迷子確定だな。

「でもちよつと外に出る位なら大丈夫だろ」

なんやら危険な台詞だが、ただ障子を開けて部屋から一步外に出るだけ。

そう一步。それ以上は進まない。これなら絶対に迷子にならないはずだ。

それにここまで連れてきてもらったお礼を言わないといけなし。

という訳で障子オープン！

目の前に広がるのは！？

「見事な日本庭園」

立派な松の木に大きな石がある小石で作った泉のようなもの（枯山

水だっけ？名前忘れた）が目映る。
ああ、いいなこうゆうの。この和の雰囲気ってなんだか心が洗われる。

ヒュッビュン ヒュンヒュン

ん？何か音が聞こえるぞ？
風を切る音？素振り？

少し先に誰がいるな。どうしよう？

さっきも言ったが俺は白玉楼の構造を知らない。
下手に動いたら迷子だ。

いや、落ちつけ。あそこにいる人に案内してもらえばいいじゃないか。

それなら幽々子さんに会える、お礼が言える、迷子にならない。

完璧な作戦だ。失敗の要素がない。後は実行に移るのみ。

「さて、音のする方へ行きますか」

「（あの子は確か……妖夢と呼ばれていた……）」

進んだ先には銀色の髪をした少女。少し幼い感じはするが10代半ば位だろう。

横に浮いているのは何だろう？

妖夢の背後には身長と同じ位はあるだろう大きな人玉の様なものが浮いている。

気の塊？守護霊？まあなんでもいっか。

「（おおスゲエ。あれが剣舞ってやつか）」

妖夢は大小二本の刀を振り回している。

水が流れる様な動きから閃光のように速い斬撃が繰り返される。剣術には詳しく知っているわけじゃないがかなりの腕前だろう。

しばらく眺めていると

「（構えが変わった？大技か？）」

姿勢を低くし刀を構えに変わる。しかしこっからじゃうまく見えな

い。
妖夢は舞いながら前進していたからな。身をもう少し乗り出さない
と…

パキッ…

「っ！誰だ！」

しまった。枝か何かを踏んだようだ。

「ゴメンゴメン。ちょっと見惚れてた。驚かせるつもりはなかったんだ。」

妖夢は剣を突き付けながらこちらを睨んでる。

あゝやっぱり警戒しちゃってる…覗きが問題ありだった？

ん？こつちに近づいてくる。あれ？刀を振り上げてどう…

「って危な！！」

間一髪の回避！

え？なんで？どうして？

「貴様！どうやってここへ入ってきた！自分から現れるとはいいい度胸だな盗人め！！」

ん？あれ？……もしかして

「……マジか」

「さあ！覚悟しろ侵入者！！」

「（幽々子さん…俺の事説明し忘れたな…）」

どうやら俺は敵とみなされたようです。

勘違い戦闘（前書き）

主人公の口調が変わるのは仕様です。

勘違い戦闘

「くっ！」

上下左右から襲いかかってくる刃を避ける。

なんでこうなったのだろう？何処で道を間違えたのだろう？

「何が完璧な作戦だ！ちゃんと失敗の要素あるじゃないか！」

そう、この作戦の失敗要素。それは「向こうがこちらを知らなかった」ということ。

ドオン

そんなことを考えていると後ろで何かが崩れる音がする。木か何かかな？

「おいおい、いいのか？立派な庭が台無しになってるぞ。主人に怒られるんじゃないか？」

周りをみると妖夢の剣によって美しかった庭園が無残な姿になりつつある。

「貴様がさつさと切られないからだ！」

うわゝお、なんて理不尽。私だって死にたくないもの。

っ危な！こうやって考えてる間も斬撃は繰り出されている。
少しでも気を抜いたらバツサリだな。

「驚いた。私の攻撃を全て避けるとは」

自分でも驚きだよ。火事場力ってやつ？
人はやれば何でもできるんです。

「だが…これならどうだ！」

妖夢が姿勢を低くし構えを変える。あれはさっきの大技（予想）の
構え。

「待ってくれ。俺は盗人ではない！」

そうだ。俺とすることが話し合いという平和的解決の選択肢を忘れて
いた。

なんせいきなり襲われたかな。すっかり頭の中から消えていた。

この作戦なら…

「問答無用！」

ダメでした。妖夢の周りに気が満ちる。気なんて知らんけど。ただ
そんな気がただけ。

マズイ。とつさにち近くに転がっていた木の枝（妖夢が切った松）
を持ち構える。気休めだが無いよりまし……かな？

「魂魄流……」

あ、やべ。なんか来る。

一応距離をとっておこう。可能な限り下がってと。

「現世斬!」

地面を蹴り、こちらに向かって突進してくる。走りながら切りつける技なのだろう。

剣の持ち方から上から下へ切り下ろす技。これなら横に飛んで回避を…

「(そんな……マジか!?)」

近づいてくるのは妖夢だけではなかった。どうゆうわけか複数の斬撃が妖夢の横に列を作っている。

気付かずに横へ回避すればバツサリですね、はい。

正面からは受ければ回避不能、しかも広範囲に放ってるから複数の敵を狙えるお得なもの。

せめてもの救いは全ての斬撃がこちらに飛んでくるのではないこと。

「(受け止める?無理だこんな棒じゃ防げない。)」

流石にその辺で拾った木の棒(松)ではキツイ、とゆうより無理だろ。

これだって妖夢が切ったものだし。

ならどうする？受け流すか？そんな技術俺にあるか？

いや、俺にはやるしか道は無い！

周囲の斬撃は無理だが正面、つまり妖夢から繰り出される剣はなんとかなるかもしれない。

こちらに振り下ろした瞬間剣の腹を思いっきり叩く。少しでもずらせればいい。

相手が相手だ、無傷でかわせるなんて思っちゃいけない。腕の一本は覚悟した方がいいな。

動きは向こうの方が早い、剣を振り下ろす同時にでは間に合わない。剣を振り下ろすのを予測してその前に動かなければ。

「はあああああ！」

今だ、この瞬間だ。

「フッ！」

すかさず枝を振る。後は己の力を信じるのみ。

そしてお互いの武器（俺の方はそう呼べるか微妙だが）がぶつかる

「は？」「え？」

事は無かった。

目の前に、俺と妖夢の間に、それ、は現れた。空間が裂けるように……いや、穴？

とにかく本当に裂けている。その中に妖夢は落ちて行った。

「きゃあああああー！！！」

ドッシャーン！！！！

大きな音と叫び声が後ろから聞こえる。

「なんだ…これ？」

暫らく呆然とする俺。

「いたたた…今のは紫様の」

ガラガラと音をたてながら妖夢が起き上がる。
怪我は……なさそうだ。ギャグ補正？

いやいや何を言っただ俺は……

それに紫さん？

「はあい、無事かしら？」

噂をすれば何とやら。いつの間にか背後に立っていた。

「俺は無事ですが……あのこれは？」

俺は‘それ’を指差しながら聞く。

「これは境界よ。私はスキマって読んでるけど」

「境界？スキマ？」

なんのこっちゃ？

「紫様！なぜ侵入者を庇ったのですか！？」

「落ちつきなさい妖夢。彼は侵入者ではないわ。客人よ。」

「え？客…人？」

あ、おもしろい表情になった。

わけかわんなーって顔だな、あれは。

「詳しい話は中でしょう。二人とも朝食はまだでしょう？藍が作ってくれたわ、冷めないうちに行きましょう。」

能力、弾幕（前書き）

急いで書いたからいまいちかな

能力、弾幕

「言っ言っ」

炊きたての白いご飯、こんがり焼けた魚に味噌汁と漬物。

これぞザ・和食（朝）だな。

朝食はしっかり食べる。1日の始まりはきちんとしないと、これ重要。

「それで、あれは何です？」

俺は外（壊れた壁&障子の向こう側）の‘スキマ’を指差す。

妖夢曰く、紫さんの仕業なるもの。

因みにあの後、妖夢から物凄い勢いで謝られて勘違い事件（命名俺は無事（家以外は）に解決した。

「スキマ？」

「そうではなくて…それとこっちが聞かれても……」

さっきからあれが怖い。スキマの中から大量の目玉がこちらを睨んでくるんだよ。

なにあれ？あの中には何が住んでるの？

「紫ーもぐもぐ、意地悪しないで教えてあげたらー？もぐもぐ」

「冗談よ。この後に説明するわ。それと幽々子は喋るか食べるかどうかにしなさい」

口いっぱいに詰め込んで頬を膨らませながら食べる姿はリスのようだ。よし、脳内で永久保存。

「それともう一つ」

再び紫さんに質問をする。

「何かしら？」

「一人多くないですか？」

俺は横を指差す。

「あはは」

そこには朝っぱらから酒を飲んでいる頭に角を生やした女の子が座っていた。

「よゝむゝ、おかわり」

「はい、ただいま」

……更に疑問が浮上した。あの身体の何処にあんな量が入るのだろ

う？

「ご飯何杯目だ？明らかに量おかしいよね？」

「鬼？」

「そうだよ。私は伊吹^{イフキ} 萃香^{スイカ}、よろしく」

朝食を食べ終え、今、居間に集まっている。

……狙ったわけじゃないぞ。

話を戻そう。周りにいるのは幽々子さん、紫さん、そして萃香さん。妖夢と藍は食器の片付けをしている。橙はその手伝い。

萃香さんの外見はとても幼い。10歳前後といったところだろう。だが見た目に騙されてはいけない。紫さんの旧知らしく既に数百年は生きているらしい。

そんな彼女が何故ここにいるのかというと

「白玉楼の修理？」

「そそ、昨日の夜に紫に頼まれてさうたぶん壊れるだろうから来てくれたって」

ウィーと少々オヤジ臭いことを言いながら酒を飲み続ける幼女（外見のみ年齢はスゴイよ）。

この光景は道德的にどうなのだろう？鬼だから問題なし？

ていうか紫さん勘違い事件（命名俺）が起きると分かってたのか？確信犯？

「さて、そろそろいいかしら？」

こちらの会話が終わると待ち侘びたかの様に紫さんが話し始める。

「まずはさつきから気になっているだろうあの説明ね」

視線の先には朝から庭にあるスキマ。

「あのスキマは私の能力で生み出したものよ」

「能力？」

「そ、能力」

能力とは、ある程度力を持っていれば誰もが使えるもの。能力名にはそれぞれ【くする程度の能力】とつく。

その基準は曖昧だが大抵の妖怪ならば扱うことができるらしい。また、人間でも妖怪と戦えるほど力があれば能力を得ることができる。能力は個々によって違つらしく同じ種族でも異なるものを手にする場合がある。

さらに能力というものは目覚めるのと同時に扱い方もわかるのと。だからある日突然「あれ、俺って【くする程度の能力】を使えるんじゃない？」と気がつくらしい。

「私の能力は【境界を操る程度の能力】。これを使えば……」

そう言つた後、紫さんの前にスキマが現れる。そこにズブズブと左手を入れる。

すると俺の肩に何かが触れた。

振り向くと顔の横にスキマが開いてそこから手が出てきている。

「こうやって別の場所に繋げることができるのよ。他にも色々使い方はあるけれど殆ど移動位にしかなってないわね。」

「凄いですね…」

何でもないように説明していたけれどとてもないものなんじゃないか？

境界は全ての物事に存在する。‘もの’が‘もの’であるために必要な存在。

それを操るって程度ですむのかこの能力。

「天空もたぶん使えるんじゃないかしら？」

え？マジで？

「だって凄い力を感じるし」

「そうよね、その辺の妖怪に比べると随分多いわ」

ほほー、もしかして俺ってさいきょー？

／ あいた最強

あれ？おかしいな……今、幻聴が聞こえたような…

ま、いいや。

「せつかくだし天空。何か術を見せてもらえないかしら？」

「お、いいね。さっそくやって見せてよ」

いや、何かって俺なにも…あれ？

頭の中に知らない知識がでてる。

「（これって……）」

手を前にかざし知識の中にあつた方法を試す。すると

「おっ」

「あら」

赤や青、緑など様々な色をした鮮やかな弾幕が手から放たれた。
弾幕はそのまま前へ進んでいき

ドオン

近くの桜の木を消し飛ばした。

「……」

やっちまった。

「あ、天空。いくらなんでも木を消すことはないんじゃないかな……」

「俺もここまでとは……」

一発一発がそれなりの威力をもっておりそれが複数直撃したため粉々になった様だ。

倒された木は根元から折れ、見るも無残な姿になっている。

「えと、まあこれなら万が一妖怪に襲われても大丈夫そうね」

「そ、そうね」

その場いた全員が驚きを隠せない様子だった。

俺の脳内に現れた知識、それは妖術に関するもの。なぜこんなものを俺が知っているのかはわからない。わかるのは

「（これは…この威力はマズイのでは？）」

一応知識の中には対人向けとなっていたが明らかにおかしい。軽く放っただけあの威力だ。本気でやったらどうなるか…

「何事ですか!!」

「い、今の音は!？」

騒ぎを聞きつけて台所にいた妖夢と藍が慌ててやってきた。

「妖夢くちようど良かったわ。何か甘いものが食べたいから戸棚にあった羊羹でももってきて」

「そのついでに酒のツマミになるものもよろしく」

「え?でも…」

「何でもないわ。ちょっとした事故よ。」

「はあ…」

「ほらほらいいから、藍も手伝ってあげなさい」

納得してなさそうな二人を無理やり押し返し事なきを得た…と思っ

睡魔、修理（前書き）

ちよつと無理やり感が…

でも安定しないのがこの作品の……欠点でしかない

睡魔、修理

「フツ…セイツ」

積み上げられた木材を肩に乗せ、桜の花弁が舞う庭を歩く。

春特有のポカポカと暖かくとても心地よい。何もせずぼっと日向ぼっこでもしてみたい、きっと心地よいだろうな。

「萃香さん。持ってきました。」

「お、ごくろうさん」

適当な場所に運んできた木材を置く。これらは今朝壊れた屋敷の修理のために使われる。

「他に何か手伝えることはありませんか？」

「それじゃあ、あそこの床を直すから板を持っててくれないかな」

指差す方向には50cm位の小さな萃香さんがいた。

萃香さんの能力は【密と疎を操る程度の能力】。

身体の密度を低くし霧状にした後再び密度を上げもとに戻す。こうすることによって自分の分身を作っている。

「にやはは〜」

また、この能力はもの以外にも有効で、心にも通用する。

密度を上げるには周りのものを萃めなければならない。それを応用して周りから‘やる気’を萃めている。

「zzz」

その影響が春の陽気も重なり幽々子さんが寝てしまった。

「……ふぁ」

紫さんも眠そうに目を擦っている。

うん、美女二人が並ぶと絵になるな。

ガッン！

「あいたー！ー！！」

「あ、ゴメン」

金槌で思いっきり指を叩かれたぜ。マジ痛い。軽く言ってるけどスゴイ痛いよ！

「い、いえ……こっちも…余所見してたんで」

俺もやる気を取られてるからな、しっかりしないと。

集中、集中。

ゴン！

「アッー！！」

「……」めんなさい

「ふう、終わった」

修理したての床に寝転がり指を見る。あの後から指は氷を当てて冷やしておいてある。

少し前まで指を無駄に刺激していたとある感覚は消え失せ、腫れも徐々に引いて元の状態に戻りつつある。これならば大丈夫だろう。

「えーと、ごめん。なんか今日調子が悪くてさ…」

萃香さんは俺の指を見てそう呟く。

「いえ、気にしないでいいですよ。もう何ともないですし」

プラプラと手を振って大丈夫だということを表した。

「それならいいけど…」

俺の横に座りながら返事をする。

「なら…」

ゴソゴソと何かを取り出そうとしている。

「一杯どう？」

ドンツとでてきたのは大きな酒瓶。どこからそんなもの出てきたのか突っ込みたい。

「これはお詫びってことでさ。飲んで飲んで。」

杯を渡されそこに透明の液体が注がれる。俺はそれを一口飲む。

「ん、おいしいですね」

「そうでしょ。これ手に入れるの結構苦労したんだよ」

と、グビグビと酒を飲み始めた。

「そういえば天空はよくなんともなかったね。紫ですら眠るくらい
萃めてたのに。」

言われてみるとそうだ。酒が切れたという理由で早く作業を終わら
せようとした萃香さんはやる気を集めようとした。

だが、春の陽気でのんびりしていた人が多かったのか思うようには
いかずあまり萃まらなかった。

そこで更に力を強くし多く萃めようとした結果が今の状況である。

そんな中俺は少しぼうつとする位であまり影響は受けていないよう
だった。

「もしかして何か能力が働いてるとか？」

うーん、ありえなくも……ないのか？

俺は自分の能力のことわかってないからなんとも。

「そうだ、聞いておきたいんですが俺って妖怪ですか？」

今、一番聞きたかったことを聞いてみた。

自分の正体について。自分では人間ではないと思っている。

根拠はないがけど。でもあの殺人弾幕。一応対人向けではあるが明
らかに威力がおかしいあの弾幕。

記憶を失う前に何かがあった。または何かあって記憶が飛んだ可能性があると予想する。

そこで妖怪化したのかもしれない。人から妖怪になるのは別に不思議ではないし、それで力が上がってあの威力になったのかもしれない。そう俺は考えた。

「少なくとも人間ではないとは思っけど」

やっぱり…でも、けど？

「妖怪だとは思っ。でもなんというか、うん……とにかくわかりづらい。そうゆう事は紫に聞いた方がいいよ」

わかりづらい？

どうゆうことだ？

「あ、そうそう天空」

急に何かに気付いた様な顔してこちらを見つめる。

「どうしました？」

「ご飯、どうしよう…」

気付けば時刻は昼を少し過ぎた頃。ちょうど腹もすいてご飯が恋しくなる時間帯。

しかし皆寝ている。紫さんも耐えていたけれど気付けば夢の中に旅

立ってしまった様だ。

妖夢と藍と橙も氷を取りに行く際に確認済み。

「……とりあえず、周りの人たちを布団に寝かせて……それから考え
ましょう。」

そう言って5人のいる所へ移動した。

睡魔、修理（後書き）

萃香の口調はこんな感じなのか？

わかんない。

お知らせのようなもの

どうも わっくん です。

何を知らせたいのかというとちょっと文を書き直そうかと。

といっても通常どおり更新は続けます。ただ作品の初期設定では困ったことが起きたためストーリーに若干の変化があると思います。

どの位変化するかというと‘橙’が現れます。

明日以降の更新では唐突に橙が登場します。それまでの話は修正でき次第更新しますのでご了承ください。

以上、お知らせのようなものでした

投稿のための文字稼ぎ投稿のための文字稼ぎ投稿のための文字稼ぎ

運搬、任務

「…むうん」

幽々子さんと紫さんを移動させる。

俺が幽々子さんを、萃香さんが紫さんをそれぞれ運び出す。

俺は肩から首にかけて片腕を回し、反対側の腕を膝の……要するに
お姫様だっこをしました。

「!!……っ」と

わっ軽！幽霊って軽いんだな。やっぱり身体が無いからか？

つか力入れすぎた。ちょっとバランスが崩れ…

「…んん」

あ、やべっ

「…………すう……」

…………どうやら目は覚まさなかったようだ。

ふう、危ない所だった。慎重に慎重に。

ずるずる

なんだこの音？

「
」

あゝ、萃香さん引きずってるよ。そりゃ身長とかの問題はあるけど
ちょっとひどくね？

起きない紫さんもそうだけど。

「
ん

「
お

「
あ

二人を客室に運んだあと居間に向かっている途中、目を擦りながら歩いてくる藍の姿があった。

普段頭の上に乗っている帽子も取れいかにも寝起きですつという雰囲気溢れださせている。

因みにさっきの台詞の順番は上から俺、萃香さん、藍でっせ。

「目を覚ましたのか」

「はい、といってもさっきですけどね」

寝癖のついた……えと、尻尾らしき何かを揺らしながら答えた。

「とりあえず、顔を洗ってくるといいぞ。尻尾も面白いことになってるし。」

その言葉を聞いてはつとした藍は自分の尻尾を確認する。

「…うわ」

その口からはこの世の終わりの十数歩手前だみたいな感じの声が出てきた。

「し、失礼します。」

そう言つて、藍は少し顔を赤らめながら廊下の端へ消えていった。

やっぱり寝癖は寝癖。どの部位だって恥ずかしいものだということなのか？

「さて、今度はこの二人ですね」

居間に辿りつくと案の定妖夢と橙が眠っていた。

「……ニヤ」

「うっ…そこは……」

ただし橙が妖夢の半霊を抱き枕のように抱えている。

半霊と本体の感覚は繋がっているのかときおり妖夢はうなされている。

それに対して橙はとても幸せそうな顔して気持ちよさそうに顔で寝ている。

「それじゃあ、橙を任せるよ」

「了解しました」

橙の前まで移動する。

「……」

そしてここからどうするか。

まず、がっちりとホールドされている半霊をどうにかした方がいいと思われる。

さっきも説明したが感覚が繋がっているようなので放っておくわけにはいかない。

「とりあえず引っ張ってみるか」

半霊の先っぽを掴む。ひんやりとした感覚が掌から伝わる。

「せいっ」

軽く力を入れて引っ張る。

「んん」

ダメだ。放そうとしない。

「天空、何してんだ」

部屋の外から声が聞こえる。萃香さんは先に出て行っているようだ。

「はい、今行きます。」

と、言ったもののどうしよう。

「逆から攻めてみるか」

半霊は形状は人玉に近い。そのため先が細く、反対側は太くなっている。

さらに橙の手はちょうど真ん中あたりに回されているからさっきとは逆の引っ張り方をすればいいと。

「ふんぬ、らばっ」

にゆるん、という音が聞こえそうなくらいぬるっと引っ張り出せた。

「よし、ミッションコンプリート」

俺は片手で橙を抱きかかえて半霊を腰に挟む。

念のため忘れ物がないか確認した後部屋をでた。

一週間後、朝

「あゝ頭が…」

俺が白玉楼に住み始めて1週間がたった。

その日の朝、小鳥の囀「さえず」りとか太陽の光ではなく頭痛によつて目を覚ます。

頭部を少し動かすだけでガンガンと鈍い痛みが襲ってくる。

原因はわかっている

「昨日飲みすぎたか…」

二日酔いだ。

「あら、おはよう。天空。」

「おはよう…ございます、幽々子さん。」

顔を洗った後、片手で頭を押さえながら居間へと向かうと白玉楼の主である幽々子さんが座っていた。

「妖夢は台所ですか？」

「ええそうよ、今日は遅起きね。顔色も悪そうだけど大丈夫？二日酔いかしら？」

いつもは妖夢と同じ位に起きているからな。それと比べると確かに遅い。

妖夢は早起きだ。早朝から剣の鍛練を行っているからだ。

最近は俺もその時間に起き共に修業をしている。

俺がやっているのは妖術の練習。その結果あの危険弾をコントロールに成功した………かった。

いや別に練習をしようとしなかったわけじゃないよ。危険だから使用禁止令がでたんだ。

あ、でもまったく進歩をしなかったわけでもないぞ。

別の術を練習したんだ。危険弾制御の方法を考えようと精神統一をしたらいくつかの術が頭の中に浮かび上がった。

その中に‘封印術’なるものがあつた。それを使い俺の力の一部を抑えることで制御を可能にした。

威力は当たるとちょっと痛い位、力を込めると軽く人が飛ぶ程度までになった。

で、俺が二日酔いになっている理由だが昨晚に八雲一家と萃香さんを交えて宴会を行った。

別に何か目出たいことが起きたわけではない、ただ暇だったからなんとなくやってみたらしい。

その時に幽々子さん、紫さん、萃香さんの三人が飲む量はかなり多かった。まあ彼女達からしたらほんの少しだった様だが。

途中寝てしまったため何が起きたかはわからないが目が覚めた時には空になった酒瓶と樽が転がっていた位だからかなり馬鹿げた量だと想像できる。

正直、俺には到底辿りつけない世界だ。

「はい…ちょっと妖夢の所へ行って水貰ってきます。」

土気色をしているだろう俺に対して超笑顔で見送る幽々子さん。あ

れだけ飲んでなんともないのが不思議でしょうがなかったが、そのおかげでイイモノ（幽々子さんスマイル）を拝むことができたのでその疑問は一瞬で忘却の彼方に消え去った。

「妖夢さん妖夢さん、そのお腰に付けたお水をくださいな」

「はい、腰に付けたものではありませんがどうぞ」

俺の朝一ジョークを華麗にスルーした妖夢はコップ八分目位に入った水を出してきた。

「はあゝ五臓六腑に浸みわたるゝ」

「それ絶対使いどころ間違っていますって」

何故か無駄にテンションの上がった俺にクールな返答ありがとうございます。

それにしても妖夢も二日酔いしてないんだな。

てっきり俺の同士になっていると思ったのだが。

「そうだ、何か手伝えることはないか？」

今日は寝坊したからな。いつもより気合いを入れるぞ。

「それじゃあ、そこにあるのを幽々子さん達の方へ運んで行っても
らえませんか？」

妖夢の指差す方向にはさつき出来上がったのだろう朝食が湯気をた
てて置かれている。

「わかった。持っていこう。」

お盆に料理をのせる。いつもこの量の朝食を作っている妖夢は凄
いと思う。人一倍……いや、人五倍位は食べる幽々子さんの食事をき
ちんと準備できるのだから。

さて、さっさと幽々子さん達の所へ運びましょうか……達？

なるほど…確かに、達だ。

「どうも、天空。飯貰いにきたよ。」

「すいません、お邪魔しています。」

「来たよ。」

居間に戻ると萃香さんと八雲一家（紫さんを除く）がいた。

「どうも皆さん昨日ぶりですね。」

朝食、その後（前書き）

ちよつと短め

朝食、その後

「なあ藍、紫さんが見えないけど今日は来ていないのか？」

お盆に乗った料理を妖夢と共に皆の前に置きながら話す。

ここには藍と橙しか来ていない。

大抵は三人で来るのだが紫さんだけいないというのは珍しい。

「紫様は動く気がでないので今日一日寝てるそうです。」

どうゆう反応をすればいいのか若干迷うな…

まあ、大丈夫そうだからいいか。

「おい天空ーこっちにも味噌汁を頼むよー」

おっとやべ、萃香さんの所に配り悪れた。

「天空さんちよつといいですか？」

食後、片付けも一通り終えた時、藍に呼びとめられた。

「この後少し手合わせをお願いしたいのですきですか？」

「……何故に？」

多分、今の俺の顔はかなり引きつっているだろうな。

まさか藍の口からそんな言葉が出るとは思わなかったもの。

「紫様に頼まれたとしか…それに手合わせといっても術を少し見る程度ですから。」

「…軽くならな」

この後布団を干さなきゃいけないし。

「ありがとうございます。それでは先に庭に出ていますので準備ができたらいらしてください。」

「さて、ホントどうしよう。」

あの後幽々子さんに庭の使用許可を貰い自分の部屋に戻り必要なものを取りに行った。

藍は特別戦闘好きという訳じゃない、むしろ性格は丸い方だ。理由も無く自分から戦いにいくことは無いはずだ。

「紫さんは何をしようとしているのやら…」

引き出しを開け札を何枚か取り出す。

藍は妖獣であり、紫さんの式神でもある。

九尾の狐であるため人間より高い知能と力を持っている。さらに長い間式を続けていたせいか妖力が大きく自分で式を持つことを可能にした。因みにその式というのが橙である。

簡単に説明すると藍は強よってことだ。

俺も一応術を使えるのでまったく戦えないということはないだろうけど経験不足だ。

…っと、何考えてんだ。戦うって言っても死合い（誤字にあらず）じゃないんだ。

もう少し軽い気持でも大丈夫……だといいな

「ま、そんなわけないけどな。」

俺と話していた藍はわずかだが殺気をこちらに向けてきていた。

あれは本気「マジ」でやる気かもな……………勘だけど。

「それじゃ、行きますか。」

手合せ、弾幕（前書き）

いや〜どうもお久しぶりです。すみませんちょっとリアルの方が忙しくなりました

これからは前の様には更新できませんがどうかわかりませんがこれからも書き続けたいと思いますのでもう少しお付き合いいただけると嬉しいです。

手合せ、弾幕

「ら〜ん〜来ったぞ〜」

あいかわらず沢山の桜の木が植えてある白玉楼の庭。

桜は昼夜問わず花弁を散らしながら辺りに春の香りを漂わせる。

白玉楼の庭にはどうゆうわけか一ヶ所、ぽっかりと空いている場所がある。

そこだけ桜の木がまったく生えておらず広場の様な状態になっていて妖夢が剣の鍛練のために使用している場所でもある。

ちなみに妖夢の祖父であり剣の師匠でもある先代白玉楼庭師、魂魄妖忌「コンパク ヨウキ」もそこで鍛練を積んでいたらしい。

俺が広場に到着するとそこには金色の毛並みをした妖獣、八雲 藍が立っていた。俺の間延びした呼び掛けに気づいたのか頭を下げ挨拶をする。

「お待ちしておりました。天空さん。」

「こんにちはー」

「お、なんだ橙もいたのか。」

藍の後、というより尻尾の中からヒョコッと顔を出してきた。

「なあ藍、その敬語はどうにかならないか？その何というか…なれないからかな？」

「こちらに聞かれても…」

なれないというのは本当だぞ。呼ばれると若干背中が痒くなる気がする。

何故か先輩から敬語で話されてるからな。普通こっちが使うべきものにね。何ー故ーか、俺は使うと言われる。

あ、先輩っていうのは従者的な意味でつてこと。俺も幽々子さんの従者になったんだよ。あの時は嬉しかったな。ここで働く事になったのだから当たり前かもしれない。けどね実際に言われるとグツと来るよ、マジで。だってあの笑顔でだぞ、ついつい小躍りしそうになったさ。

とにかく言いたい事をまとめると、何故か藍から敬語が使われるんだ。俺としては普通に接して欲しい、それだけ。

「とりあえず、敬語やめよう、フレンドリー、話そうぜ。」

「……何故カタコトなんですか。」

む、俺の熱意があまり伝わってなさそうだな。

「ま、とにかく準備はいいですか？」

「ん、そうだった。」

屈伸運動をしアキレス腱を軽く伸ばし準備運動をすませる。その後意識を集中し両手を合わせる。

「身体強化の法」

使用したのは陰陽術。周囲から‘氣’を集め身体中に流し込むことで自分の身体能力を上げる術の一つ。氣は魔力と同様に術を使用するの必要とされる。この氣の扱いに長けたものが陰陽術だ。さらにこれは記憶の中にあつた術の内でもっとも活躍するであろうもの。人間と妖怪とでは身体能力に大きな差がある。接近戦をする際これを補える術は必要不可欠といってもいい。

「よし！もういいぞ。」

「わかりました。それでは…」

藍の目がキツと鋭くなる。俺もそれに合わせて構える。

「さあ！行つて来い、橙！」

「はい！藍様！」

「つて、ええ!!」

そっち!?

「ど、どうなさいました!?!」

「あゝいや…なんでもない」

まさか……ね。てつきり藍が戦うと思ってた。

天空さんと橙の手合わせが始まった。今回、頼まれたことは二人を戦わせること。紫様の命とはいえ少々気が引ける。

「いくらなんでも行き成り戦闘だなんて…」

紫様は一体何をお考えになっているのだろうか。

「いっくよー！」

橙は無数の魔力弾を放った。猫の式である橙は素早い動きで相手を翻弄しながら攻撃するのを得意とする。式の式であるため妖怪としての能力は多少低いもののその辺の魑魅魍魎よりは強い。

「そーれっ！！」

時折弾幕の間から放たれる突進。人間なら訓練でもしていない限り今頃地面に倒れているだろう。

「！！」

だが天空さんは一瞬驚くものの慌てる様子もなく冷静に対処し避けていく。あの庭師の剣をかわしたというのもうなずける。しかし……

「（これで勝負は決しましたね……）」

橙が必殺の構えをしたのを見て私はそう思った。

おいおいおいおい……

「どこが軽くなんだ！」

四方八方から襲いかかる弾幕を避け続けている。こちらも魔力弾を放ち応戦するが高速移動する橙には当たることなくそのまま明後日の方向へ飛んで行った。

「くっ！」

「少し本気を出すよ！ 天仙鳴動！」

突然橙が空へ飛びあがる。そのまま宙を翔け徐々に加速しながら弾幕を放ってきた。

「流石に避けれな……っ！」

迫りくる魔力弾に俺も魔力弾を放ち相殺させる。だが慣れていないせいか一度打ちだすには数秒のタメを必要とする。だがこれは俺の場合だけであって橙にはない。すなわち……

「がふっ……」

ジャストミートするわけだ。超痛え……

「く……」

倒れまいと何とか踏みとどまり体制たて直す。正面を向くとちょうど空中で立ち止っている橙とこちらに降り注ぐ弾幕が目映った。早く回避をと思った瞬間

「おいおいおい、マジか…」

上空にあった魔力弾は突如弾け細かい弾へと姿を変えた。細かくなつた魔力弾は壁のように重なり俺を襲った。

目覚、運動（前書き）

予想以上に遅れた。

目覚、運動

「知らない天井……ではないな」

目覚めると何時の間にか布団の中で眠っていた。
現時点でのもっとも新しい記憶を探る。
確か橙と戦っていたな……

となると、今まで俺は外にいたはず……そうか、橙にやられたんだ
っけ？

最後に見た光景、あの弾幕の壁を思い出す。
あれは避けれないって。橙ももう少し手加減してくればよかった
のに。

あゝなんか今になって震えてきたぞ。

するとここは白玉楼か。

どの位気を失っていたんだろうか。また皆に迷惑かけてしまったな。

「あら、目が覚めたのね。」

天井を見つめながらぼうつとしていると、声が聞こえた。

「どうも、幽々子さん。」

声の主は俺の傍に正座をしている。いままで見てくれたのだから。
うか。

「あの、俺はどの位眠っていましたか？」

「ちょうど72時間位かしら。」

3日も眠っていたってか。

「何か食べる？」

「いえ、今のところは食欲無いんで…」

「あ、ダメよ動いちゃ。」

布団から起き上がろうとするが幽々子さん抑えられる。

「今日は寝ていなさい。」

その微笑みと優しい声により俺の中の何かが致命傷を負いかけるが、
なんとか耐えきる。

仕事か溜っている以上休んでいる場合ではない。

「しか
」

「ていつ
」

ゴスッ

「あだっ
」

扇子でぶたれた。痛い痛い。

音でなんとなく分かるだろうが何でできてんだよとツッコミたい。

「あの
」

「やー」

ゴスッ

痛い。何故喋らせてもらえないのだろうか。

「ダメよー怪我人は寝ていなきゃ」

その怪我をつくったのは貴女だろうとこれまたツツコミたいがグツと抑えることにした。

生憎そういった属性は持ち合わせていないので打たれたくはない。

「そうゆう訳で仕事はいいわ。今日は休んでいなさい。」

「わかりました。」

もう諦め気味な俺。

ここまで休みたくない俺はワーカーホリックというやつなのだろうか。

「それじゃ、お休みなさい。」

ゆっくり頭を撫でられる。やわらかい手の感触がとても心地よい。赤ん坊ではないが悪い気はしなかったなのでそのまますぐに眠ることができた。

……とはいくはずはなく。

「眠れねえ……」

今まで眠っていたせいか、再び布団をかぶるがうまくいくはずもなく睡魔との戦いは不戦勝で終わってしまった。

幽々子さんもこちらが眠ったと思ったのかしばらくこちらをしばらく見つめ、最後に一度頭を撫でた後部屋を出ていった。

「結構暇だな。」

一人部屋の中で呟く。ここで部屋を出てしまうと心配をかけてしまうので今日はここで過ごすことになる。

といっても流石に一日中ぼつつとするわけではない。数時間たったら部屋を出ようと考えている。

「本でもあるといいな。」

それまでの暇つぶしを探そうと棚を漁りに行く。

「ん？」

立ち上がったところで僅かだが身体に違和感を感じる。

多分ほうつておいても大丈夫だろう。きっと久しぶりに身体を動かしたからだ。

そこまで不快には感じないし、手足をぶらぶらと動かしてみたがちよつとキグシャクする程度で問題はない。

「筋トレでもしてみようか。」

身体を動かすのには丁度いいかもな。

「おお、俺つてすげえ。」

視界に映る上下逆さの畳と天井。普段と違い新鮮な感じがしなくもない。

「意外にできたよ。逆立ち。」

身体を動かそうと模索した結果、たどり着いたのはこれだ。
この状態で動くのは大分疲れる、つまりいい運動になる。

スタスタ

逆立ちをしたまま部屋を歩き回る。

そういえばこうやって手で進んでいくのも歩くに入るのだろうか。

スタスタ

「何、やっているのですか？」

夢中になって歩きまわっていると声が聞こえた。

「どうした妖夢。」

廊下には妖夢がお盆を持った立っていた。

「どうしたじゃありませんよ！ 怪我人が何やっているんですか！」

「いや、怪我なんて何処にもないぞ。ほらこのとおり。」

そう言って俺は腕の力だけで飛び上がり空中で一回転した後、床に着地した。

やつておいてなんだが我ながらすげえと思ったり。

「な？」

「いいから寝ていてください！」

温度、抽出

「……………」

壁に寄りかかり染み一つない天井を見上げる。

別に天井に何かあるわけでも見上げることでも何か起きるわけでもない。もちろん意味もない。

視線を降ろし妖夢が置いてったお盆を見る。

お盆には筒状の入れ物と茶葉を中に入れ湯で煎じる為に使う土瓶がある。

俺はお盆まで近づき筒を開ける。中には乾燥した葉っぱらしきものが入っている。

それを取り出し土瓶に入れる。その後土瓶を持ちながら立ち上がり部屋の隅にある「魔法瓶」へ向かう。

魔法瓶とは中に水を入れると自動で温めお湯に変えることができる魔法具のこと。

別に名前がそれらしいからといっても擦ると願いを叶えてくれそうな魔人が現れたりはいしない。

外界で開発されたもので本来環境の違いからこちらでは使うことができない。だが河童達により改造されこちらでの使用を可能にした。因みに改造する前の魔法瓶は紫さんが持ってきた。

俺は土瓶へと湯を移しお盆の上に置く。その後戸棚へ向かい湯呑みを取り出す。

土瓶の前へ戻り茶葉が開いていることを確認し中身を湯呑みへ注ぐ。十分に入ったところで注ぐのを止め湯呑みに口をつける。

「……ふう」

中に入っている緑色の液体
を見上げ呟く。

緑茶を一口飲んだところで再び天井

「……………暇だ。」

「何故、急須、と呼ばないのですか？」

俺の淹れた緑茶を飲みながら妖夢が聞く。

「なんとなく。しいて言うならあまりにやることに無いから？」

疑問文に対して疑問文で答えるのは間違いだが俺もハッキリと答えられないのでこう答えた。

「まあただの気まぐれだ。意味は無い、気にするな。それより俺の淹れた茶はどうだ？　遠慮せずにダメな所はダメとハッキリ言っ
て欲しい。」

「少し渋いですね。お湯の温度が高すぎたようです。」

蒸気を出している湯呑みを見ながら答える。

「湯冷ましが見つからなかったからな。」

「それと抽出時間が後10秒ほど必要だと思います。」

うーむ、温度はともかく時間はちょうどいいと思ったんだがな。
中々難しい、次からは気をつけよう。

「なあ妖夢。仕事の方はいいのか？」

湯呑みに入っている液体を飲みほした後妖夢に質問する。
視点は天井に向けてはいない。なぜなら首が疲れたから、それ以前
に緑茶が飲めないから。

「天空さんが起きている間は暇にさせないことが仕事です。」

「？　俺はそんなに暇そうにしているのか？」

「さつき暇だって言ったじゃないですか。」

そういえばそうだった。

「俺の相手をしている間幽々子さんの世話はどうなるんだ。」

「それなら心配はありません。幽々子様には紫様がついていきますから。」

紫さんと一緒にいるということは藍もいるということだな。そうゆうことなら大丈夫だな。

「なら俺が寝ていたらどうしてたんだ？」

「そのまま何もせずここにいます。」

「……気合入ってるな。」

「それが仕事なので。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4125n/>

東方の小説らしきもの（仮）

2010年11月25日02時20分発行